

裏鬼道・夢天凌辱

（体験版）

18歲未満閲覧禁止

「村に若い男がやってきたな」

「なかなか威勢が良さそうだ」

「我ら裏鬼道、不老長生の術にも心血をそそいでいる」

「あの男で、房中術を試してみるか」

男衆たちのつぶやきが、闇に消えた。

目が覚めると、水木は布団の上に掛布団を掛けられず寝かせられていた。驚いて飛び起き、辺りを窺う。地面が茶色の板張りということと、妙な香の匂いに、一寸先しか見えない暗闇しか確認できず、水木は急激な不安を覚えた。

（なんだこれは？俺は一体・・・）

すると、金物がこすれ合う不協和音が空間にけたたましく響いた。

「お前にはこれから術の実験体になってもらう。痛みはない。参で、身体の変化がおこる」
どこからともなく声が響き、水木は周辺を見渡したが、暗がりでも何も見えず、ただせわしなく左右上下に首を巡らせた。

「一体何なんだ！ここはどこだ！」

水木が叫ぶが、帰ってくるのは痛いほどの静寂だ。

「おい！ゲゲ郎！いないのか！」

そんな薄暗く不安をあおる空間に、シャン、と錫杖の鳴る音がした。

「壺」

と低い声が響き渡る。

「式」

続いて声が響く。

「参」

その瞬間、ドンと錫杖で地面が叩かれ、一層激しくシャンと音が響く。
その直後、水木の身体に変化が起こった。

（なんだ？身体が熱い・・・！）

急に長時間焚火の前で温まっていたかのような、ほわりとした微熱が水木の体内を巡る。着ている浴衣を脱ぎたいほど暑くはないが、明らかに自分の身体には変化が訪れていた。
そして、また響く「忒」という声。続いて、「弐」、そして

「参」

また激しい錫杖の音が響くと、次には背中にゾクゾクと涎が出そうな感覚が走った。

「うわあああ！」

背中に虫でも這ったのかと驚愕し、背中を反らせてみると、浴衣が擦れた部分で次々とゾクゾクとした感触が広がり、身体の熱さも相まって、水木はハアハアと荒い息を吐いた。

（なんだ？なんだこれ、身体が・・・ゾクゾクして、一体何なんだ・・・！）

この身体の熱は、これまで若い水木の身体を悩ませていた。どうしようもなく消化したい衝動と、貪りつきたいほどの衝動に駆られる、欲情という名の内なる獣だ。それが今、自分の意志とは無関係に体中を這い回っている。

「くそっ・・・！一体なんなんだ！俺をどうする気だ！」

しかし、返ってくるのはゾツとするほどの静けさだ。自分の動く衣擦れの音と、荒くなってきた吐息だけが周囲に響き渡る。

「うつ、くうつ・・・！」

浴衣の布が擦れるだけで、ゾクゾクとした怪しい感触が湧きあがってくる。落ち着いた年齢になつたとはいえ、この欲へ簡単に抗う術は十分ではない。もともとこの方面に淡泊な水木は、自分が激情に駆られるほどの場面に、ほとんどかち合わない。

自分の感情を律することには慣れている。しかし、身体の熱さを沈める方法には熟知していなかった。それどころか、自分の劣情にすら気づいていないのかもしれない。

戸惑う水木の右足首に、人間の手に掴まれる感触が走り、身体が思わず強張った。

「なっ・・・！誰だ！」

振り払おうと足を藻掻かせようとしたが、身体が思うように動かない。まるで、粘土の湯に浸かったかのように、身体を動かすのを重く感じられた。

そのうちに手が一本一本増やされ、水木の両手首や膝、首、浴衣の裾を割って内ももにまで手が伸びてくる。

「うわっ！うわああああ！」

引きつった声を上げるが、その手に触れられた部分が予想外に甘美で、戸惑いと共に水木は抵抗を続けた。

「んぐっ・・・！やめろ！それ以上はくるな！」

内腿を這っていた手がさらに上へと移動し、水木の半身に触れてこようとした。しかし、触れずに足の付け根を掠って、再び内腿を撫で続けた。

浴衣の上部は大きくはだけられ、その間に幾本もの手が滑り込み、傷痕だらけの身体の上を這い回る。気持ちが悪い状況で気分の悪いことをされているというのに、身体に灯された淫熱のせいで、水木の顔は上気し、息も上がり始めていた。

（こ、こんなところで、変な気持ちになってる場合か！なんなんだこれは！）

自分の身体の変化と状況に戸惑いが抑えられない。水木は周囲に首を巡らせるが、やはり闇が続き、敷布団が板張りの床にあるということぐらいしかわからなかった。

そして、時折聞こえてくる奇妙な数字。

「壺」

「貳」

「参」

ガシャン！と錫杖の鳴る音がして、また水木の身体が反り返る。

「んぐううううつ・・・！」

ぞくん、と涎が出そうな快感が身体を走り、完全に発情してしまった。そして、頭の中に響いてくる低い声を確かに知覚した。

「これは良い身体だ・・・」

「傷だらけだが、ほどよく強く、しなやかだ」

「穢された痕は・・・ひひひ、無いようだな・・・」

脳髓の中を這い回るような不気味な声色に、怒りよりも恐怖が先に立つ。しかし、体中をまさぐる無数の手の動きの感覚によって、恐怖はすぐに霧散させられた。

「ああつ！ぐっ・・・！何なんだお前は！」

「言ったであろう、我らの悲願のための贄じゃ。もつとも、正気で帰れるかどうかはお前次第だな」

そら恐ろしい文言を告げられたが、急に水木はむかっばらが立ってきた。

誰かに利用されて踏みつけにされるのはもうごめんだ。これなら、奴らの思惑にハマらず、徹底的に抗ってやると決意する。

心を穏やかにして、体中をまさぐる手の感触を感じないように努める。身体の淫熱も、風邪だと自分に言い聞かせて誤魔化す。

しかし、水木の男の部分だけは反応を隠し切れず、浴衣の前を上げていた。

太腿にねつとりと絡みついていた掌が二本、浴衣の前を大きく広げる。そこには、滾った雄芯があった。体中を触られるたびにゾクゾクと快感が蓄積し、こんな得体のしれない状況だというのに発情してしまっている自分が信じられない。

「い、一体俺に何をしたんだ！クソ野郎ども！」

しかし、その叫び声も情欲で上ずっている。

太腿や足の裏、ふくらはぎ、胸元、鎖骨、首筋、両脇、腹筋・・・すべてに妖しい手つきの掌が張り付き、這い回っている。

「うっ・・・くっ・・・！」

ビク、と水木の身体が一瞬跳ね上がり、強く感じたのだと周囲にわからせてしまった。触れたのは胸の突起で、水木は昔からここに弱い。人より感じやすいと言ってよいほど、その神経は鋭敏だった。

それを探り当てた妖艶な掌は、その突起に手を這わせ始めた。掌で左右にゆっくり擦られ、刺激が通過するたびにビクビクと身体が反応してしまう。

（おかしい、こんなに感じるはずはないのに！）

しかし、今水木が感じているのは確実に情欲だ。身体がどんどん熱くなり、触れられ続けている胸も、なんだか快感が強くなり始めている。

「やめろっ、そんなところ触るな！止めろ！」

水木は命令するが、当然手の動きは止まらない。ふと、突起に鋭く硬い感触が走って、また背中が反り返った。

「ぐっ・・・！」

指先の爪で突起を弾かれ、一瞬間が真っ白になるほどの快感が走破する。水木の反応で効果ありと見た妖艶な手たちは、四本の手で突起を集中的に責め始めてきた。

「うあああっ・・・！やめろっ・・・！」

爪で弾かれるだけで身体が跳ね上がる性感帯に、連続して強い刺激を与えられ、水木は混乱と共に甘美な感覚に酔いしれそうになった。

なにより、こんなにしつこく突起を刺激されたことはない。そして、ずっと愛撫されることによって、胸が熱くなって次第に我慢できないほどの熱を感じ始めた。

（な、なんだこれ、胸が熱く・・・何かが昇ってくる、熱い、熱い・・・！）

それは快楽の絶頂に似ていて、始まりがあって終わりがある快感のようだった。しかし、終わりを迎えてしまったら自分をこんな目に遭わせている者に醜態をさらしてしまう。

男が胸で達するなど、恥以外の何物でもない。

水木は抵抗しようと必死に手足へ力を入れたが、いつの間にか両手両足を無数の手に押さえつけられ、大の字にさせられ、いいようにされてしまっていた。

「くそっ！くそっ！放せ！なんなんだお前らは！」

渾身の力で振り払おうとするが、やはり泥濘に浸かっているかのように身体の動きは緩慢で、自由に力を入れることすらできない。

子供以下の抵抗力しかもたなくなってしまうた水木を容赦なく縫い留め、妖しい手は体中を這い回る。

「ううつ・・・くううつ・・・！」

また指の先が胸の突起に触れ、ビクン、と水木の身体が跳ね上がる。尋常ではない感じ方と妖しい感覚に戸惑いながらも、次第に流されたい気分陥ってくる。

しかし水木はそんな自分に気づき、すぐに己を律して歯を食いしばって耐えた。

「んぐっ・・・うう、触るな、気持ち悪いっ・・・！」

口を開けば涎が垂れそうなほど、触れられる感触を甘美に感じているが、意に反した言葉を紡がなければ意識が崩されそうだった。

さらさらとした手が体中を這い回り、背中や足の付け根を愛撫されると、ぞくんと強く感じて身体が勝手に反応してしまう。

（うぐっ・・・こんなのに負けてたまるか！）

水木は歯を食いしばり、身体に走る感覚に耐える。服が擦れただけで感じるようになってしまった身体に、明確な意図を持った手の動きは刺激が強すぎる。

「んっ！ぐっ！」

また胸の突起をかすめられ、今度は我慢できず声を出してしまう。それと同時に背中が大きく反り返る。

思う存分反応しなかったが、手足が食い止められているのでそれすらも叶わない。水木にとつては盛大な恥をさらすのを防げたため、逆に良い方向に働いた。

しかし、今度の愛撫はしつこかった。掌で突起が円を描くようにして擦り回され、連続して甘美な電流が身体を通過しまくる。

「うあっあっ！ぐっ・・・！ん、んん、あああっ！」

とうとう我慢できず艶めいた声が出てしまい、水木の口端から熱い吐息が漏れる。

片方だけ責められていたが、今度は両方を責められ、掌の感触が倍增以上の効果を発揮する。

「うううっ、あ、うああああっ！」

触れるか触れないかの微妙なタッチで両胸を愛撫され、じれったさと快感が水木を容赦なく襲う。

快感・・・そうだ、これは快感なのだ。自分では認めたくはなかったが、自分は快樂の責めを受けているのだ。

「ようやく気付いたが。これはもう、早い」

暗闇から低い声が響き渡り、水木がその方向へ顔を向けようとすると、掌が少し強く押し付けられ、そのまま上下にゆるゆると擦られる。

「うああっ！ああっ！あっああああっ！」

これまで感じたことが無いほどの愉悦が身体を貫き、たったこれだけの刺激でこんなに反応してしまう自分をおかしいと思いつつも、水木は声を止められず、身体の痙攣も止められなかった。

そして、雄芯が浴衣に激しく擦れ、下半身でも快楽を覚えてしまう。

（くそ、情けない、なんでこんなに感じるんだ！）

上半身を緩やかに責められながら、下半身はほとんど放り出されたままにされていて、そのじれったさに水木の心よりも身体の方が墮落しかけている。

胸を刺激されるたびに身体がビクビクと勝手に反応し、身体全体が衣擦れで愛撫され、雄芯も擦られる。

「はあ、はあ、や、やめろっ・・・！」

水木の息が次第に熱い物へと成り代わり、身体を走破する刺激を強く快感だと認識し、もう止めることができなくなっていた。

(こ、こんな得体のしれない物に、俺は一体何を考えているんだ！)

怒りの感情を沸き立たせようとするが、思うのは快樂をもっと欲する気持ちが強くなっていた。両手が拘束されていなければ、誰も見えていないとわかれば、自らで自らを慰めていたほどには、身体は興奮してきている。

認めたくないが、水木の身体は完全に発情しきっていた。

(なんでだ、こんなことでっ・・・！おかしい、絶対におかしい！)

自分の反応に戸惑いながら、水木は快樂に溺れかけている自らの身体を持て余していた。そしてまた響く野太く低い声。

「壹」

「貳」

「参」

再び錫杖が地面を叩く音が木霊し、その直後、水木の身体の熱が一気にせりあがった。

「うあっ・・・！」

体中を撫で回す手の感触がより敏感になり、明らかに性的な感覚が水木を追い詰めていた。

「はあ、うあああっ・・・！」

胸を撫で回していた手がさらに強く突起を押し、円を描くようにこね回し始めた。

連続して巻き起こる快感の渦に、身体の反応が止められない。自分では嫌だと思っているのに、止められない。掌の感触を強く感じるようになってから、刺激が顕著に強くなり、感じる快感が強力になってきた。

もともと胸は感じやすかったが、それだけでは説明できないほどビリビリと快楽の電流が容赦なく流れてくる。

「あっ・・・！はあ、はあ、はあ、はあ・・・！」

すると、両足の間をさまよっていた手が、急に雄芯を指先程度の刺激で突いてきた。

※中略※

水木の口から魂切るような叫びが放たれ、その体は打ち上げられた魚のようにビクンビクンと激しく痙攣した。そして同時に、雄芯からも勢いよく白液が放たれ、前後の強烈すぎる快感に水木は追い詰められ、果てさせられた。

「あっ・・・・・・・・ぐあ・・・・・・・・あ・・・・・・・・あ・・・・・・・・あ・・・・・・・・」

ドクン、ドクン、と快楽の残滓が脈打ち、激しすぎる快楽に打たれた身体が少しずつ落下する。

（あ・・・・意識が・・・・落ちる・・・・）

そう思ったが、直後雄芯をぎりりと握られ、強制的に気を付けられた。

「はぐうっ！」

一瞬で意識が戻り、握られている雄芯から懲りずに快楽が伝わってくる。

「どうだ、尻の快楽は？」

「くっ・・・うううっ・・・はぁ、俺は、感じてなんて・・・」

ズプリと再び中に指を挿入され、その淫衝撃に言葉を強制的に止められる。

「蛇を起こすには、摩羅の快楽が邪魔らしい。少し灸をすえてやろう」

男の声が響き、水木の身体を愛撫していた手や舌に大きな動きがあった。ほぼ腰ひもにかかっていただけの浴衣を完全に脱がし、力の抜けた水木の身体を自由に動かして、布団の上で再び大の字に寝かせる。そして今度は、両足を天から吊るされ、高く持ち上げられた。

（次は何をする気だ・・・もういい加減に終わってくれ！）

少しの弱気が水木の中で生じるが、憎らしいほどに自らの雄芯は反応してしまっている。あれだけ射精をすれば、今頃はもう役に立たないはずだ。それなのにそそり勃ち、そしてありえない連続射精をこれまでに経験させられた。

両足を左右に大きく開かされ、足の付け根の線がみえるほどに広げられる。

その中央でそそり勃つ雄芯は、これから標的にしてくれるのを楽しみにしているかのように力強く脈打っていた。

「ははは・・・因果なことだ、若いせいかな？摩羅の力はかなり強い」

「これからそのけしからんイチモツに拷問をかける。だが、泣いて喜ぶほどの拷問だがな、くくく」

声が聞こえた直後、周囲が真っ暗になり、水木の視界が完全に閉ざされた。

「おいっ！どうなってるんだ！なんだこれっ・・・！」

叫ぶが、自分の声がわずかに反響して聞こえるだけだ。次に耳に入ってきたのはズルズル、ぺちやぺちやと言った不穏な響きだった。

（ば、化け物でも出しやがったか？）

視界が利かない不安を押し殺し、水木は齒を食いしばった。最も弱点である男の部分で、無防備に差し出したままの恰好でいることに落ち着きのなさを感じたが、水木の意志とは反対に、雄芯は熱を持っていた。

すると、身体にぬるぬるとした長い綱のようなものが這い回り始め、気味悪さに一瞬怖気を感じたが、すぐにそれは快楽へと変わった。

（なんだこれ、なんだこれっ・・・！）

「いぐっ・・・！」

そそり勃った雄芯にもぬるぬるの綱が押し付けられ、下から上へ通過する。その感覚だけで射精してしまいそうな快楽に、水木の腰がヒクヒクと反応する。その摩擦責めは、いつ果てるともなく長く続き、ずるずると雄芯の上を這いずりあげ、水木が最初の射精絶頂を迎えるまで続けた。

「うあっ！あっ・・・あっあっ・・・！」

決して激しいものではなく、緩やかに刺激され、これまでで一番心地よい快楽だったかもしれない。ここまではわけもわからず勝手に射精させられて己の快楽を鑑みることなどできなかった

だが、初めてじっくりと雄芯で感じる快楽を突き付けられ、水木は気持ちの良い射精絶頂を覚えた。

（だ、だめだ、気持ちいいなんて思ったら、やつらの思うツボだ・・・！）

ぬるぬるの綱はかわらず雄芯を擦り続けて、二回目の射精絶頂へと向かわせる。今度はイク瞬間には動きが速くなり、さらに強烈な快感が水木を襲い、意識が快楽で陶醉してゆく。

ふんばって快楽を散らせられる足裏を上げられて、全ての快楽が雄芯に集中してしまい、愉悦をさらに強烈に感じてしまう。

暗がりの中で繰り返される愛撫にも恐怖がなくなり、水木は知らず、艶声を上げていた。

「ああ・・・あ・・・ああっ・・・！あっ！出る、あああああああ——・・・！」

びゅくびゅくと先端から白液が勢いよく吐き出され、性感神経が擦り切れそうな激悦が下半身を襲う。

そして射精が終わった直後もまだ綱は動きを止めず、ぬるぬるした身体を雄芯に擦りつけ、ゾクゾクとする快感を水木に流し込み続ける。

「あ、ああっ！も、もう出した、止め、止め・・・！」

しかし水木の声など無視され、縄は雄芯の裏筋に沿ってずるる、と下から上へと擦り上げた。

「ああああああああ！」

先ほど射精したばかりだというのに、許容範囲を超えた快楽を押し付けられ、水木は再び吐精してしまった。身体の芯まで響く強烈な射精絶頂に、身体がビクビクと激しく痙攣する。

だが、イッたばかりで敏感になっている雄芯にかまわず、まだまだ綱は動きを止めようというしない。

「止めろ、止めろっ！ああああああっ！ま、また、もうっ・・・！うああああああああ！」

陶酔の射精絶頂はその後5度も繰り返され、水木の下半身は大人しくなるどころか、さらなる悦を求めてはしたなく反応しきっていた。

（こ、これだけ出したのに、まだ・・・）

すでに度過ぎた射精絶頂で疲弊している水木だったが、淫拷問はまだまだ始まったばかりだと気づかない。

上下の激しい摩擦運動で水木を何度も射精させたヌルつく綱は、今度はぐると水木の雄芯に巻き付いてきた。

「うぐうううっ・・・！」

これまで数回の射精絶頂を強要され、すでに快楽を受け入れやすくなっている雄芯は、巻き付かれただけで腰が跳ね上がるほど感じるまでになってしまっている。
そして綱はぎゅう、と雄芯を締め付けた。

「あああああっ！」

これだけでもう、射精してしまいそうだ。迸る快感に、水木は身体をガクガクと痙攣させ、空中の両足をばたつかせて暴れ狂う。

「ははは、よくもこれだけ吐けるものだ。よほど性へのうつぷんが溜まっていたと見える」

「まだまだこれからだ、存分に愉しめ」

「一方的に快樂を与えられる状況とはどうかな？ 気持ちよいか？ 屈辱か？」

暗闇の中で響く、水木を蹴るような声に一瞬頭の熱が下がった。

（くそっ、奴ら、どこから俺を見ている、こんな姿を、見られている・・・！）

羞恥と悔しさがこみ上げ、水木は齒を食いしばった。自分の身体がおかしいのは、奴らの術のせいだ。本当に自らの夢の中にいるのなら、本人がコントロールできないはずはない。

水木は、どうにかして逃れられないかと思考したが、その理性は一瞬で霧散させられた。

雄芯に巻き付いた綱が、絞めつけながらずるずると移動し、表面を擦り上げながら雄芯の上を通過してゆく。

「あああああつ！ ああつ！ うああつ あああああつ！」

新たな感触の愉悅を流し込まれ、水木は背中をのけ反らせて快樂を叫んだ。

雄芯の上を這いずっている綱は、根元、幹、くびれ、先端全てに巻き付いて、ぬるぬると擦りながら移動し、天井の方へと上がって消えていくようだったが、奇妙なのは、綱がいくら通過しても途切れないことだった。延々と水木の雄芯を虐げながら、その責めは止まらない。

（ううつ、これじゃ何も考えられない・・・！）

すると、雄芯を締める強さが大きくなり、さらに快樂の度合いが強くなってしまう。

「うぐっ・・・！ああああああ・・・！」

さらにそのまま擦る動きが速くなり、水木の弱点は激しい摩擦責めを味わわされることになった。

「はああっ！うあああああああ！ああっ！あっ！あああああっ！止めえええええ！あああああ！」

巻き付かれて這いずられているだけでも相当気持ちよかったが、その全てを強められ、快感は倍増する。さらにぎゅう、と締め付けられた瞬間、水木の脳裏で閃光が生じた。

※中略※

「あ・・・・・・・・あ・・・・・・・・ああ・・・・・・・・・・・・・・・・」

六個の淫乱珠が引き抜かれ、挿入され、また引き抜かれた。それを何度繰り返させられただろう。

水木はようやく激感から解放されたが、その体には凌辱と激感でめちやくちにされたズタボロの意識を持った水木の精神と身体があった。

何度も虐げられた菊座はびくびくと痙攣し、水木の腰もヒクッヒクッと動いている。挿入されていたすべての珠を引き抜かれた瞬間、水木の意識は白くなり、体中の力は抜けた。

触手が水木の体中を這い回るが、生理的な反応が返ってくるだけで、脳の快樂神経を通じて水木が快樂を確認する前に肌が勝手にビクついている。

「理性が吹き飛んだか？ほら、起きろ」

暗闇の音が響き、また低い声が木霊する。

「壺」

「式」

「参」

参、で錫杖の音がして、どん、と床を叩く音が鳴った。

「う・・・・・・・・」

その音を合図に、水木は理性を取り戻した。体中を愛撫し続ける触手に身体をヒクつかせているが、まだ激しい反応ができるほどではない。

「意識はもどったか？」

「あ・・・・・・・・うう・・・・・・・・クソったれ・・・・・・・・」

その声を聴いて、闇の中からすすり泣くような笑い声がたった。水木は悔しくても指一本動かせないほど体力を消耗しており、目には力が残っていなかった。

「ここは夢の中だ。お前の体力が戻らないのは、お前が体力を消耗したと認識しているからだ。それを無くさせるよう、今から計らう」

一本の管触手が現れ、水木の口元に迫る。子供の拳ほどの太さを持ったそれは、先端からとろとろと粘液を垂らしている。

「あっ・・・な・・・」

水木が言葉を吐こうとすると、その口の中に触手がもぐりこんだ。

「んぐううっ！うぐっ！うぐっ！」

急に気道を塞がれ、水木は当惑したが、すぐに難なく息ができることに気づいた。

「ふーっ、ふーっ、ふー・・・」

しかし、喉奥に甘い液体が注がれてくる。水木の喉は叫びすぎて疲労の限界にあったため、喉を潤す液体は大歓迎だった。

「んぐっ、ごくっ、ごくっごくっ……」

水木は不思議な感覚に囚われた。液体を飲みながら、息ができるのだ。それよりも、口内の感覚で感じたことがない刺激を感じた。口の中で触手が擦れると首の後ろにゾクゾクとくすぐったい感触が走り、反射的に逃れようとするが、触手はどこまでも追ってくる。

「んんっ、んっ、んぐっ……！んんんっ！」

触手のぬるぬるした表面が上あごの裏に擦れるぞ、ゾクン、と愉悦に似た感触が走り、水木は息を呑んだ。そして、同時にごくごく液体も飲んでしまう。

口をふさがれても不思議と息はできるため、苦しくはないが、この妖しい感覚からは逃れたかった。触手はさらに水木の口の中に身を擦りつけ、敏感になった口腔を探り回る。

（なんだこれ、口の中が、変な感触が……！）

触手に舌をなぞられ、またゾクゾクとした感触を覚える。今度は首の裏から背筋に向かって感覚が走り、水木は息を詰まらせそうになった。

「んんっ！んんんんっ！んっ！んっ！」

触手が水木の口の中に入りながら、上下運動をし始めた。触手の表面が唇に擦れ、口内の粘膜に擦れ、ざわりとした妖しい感覚が止まらない。

（なんだこれ、口の中がくすぐったい・・・うつ、止まらない・・・！）

甘い液体を流し込みながら、ぬるつく触手が口内を無遠慮に荒らしまくる。乱暴にされるそれが逆に妙な気分を煽り、水木は身体をビクビクと反応させた。

「その液体を飲むと、体力がすぐに回復するぞ？さあ、たっぷり飲め・・・」

暗闇に響く声が耳に流れ込んでくるが、流し込まれる液体を拒むことはできない。喉が勝手に動いて、ごくごく液体を飲み込んで体内に入り込ませ、液体は体中をめぐるゆく。

凄悦に打ちのめされ、脱力した身体に力が戻ってくる。意識も徐々に明瞭になり、再び水木の瞳に理性と意志がめぐってくる。

意識がはつきりしてくると、ぼんやりとしていた口の感触が明瞭になり、水木はよりはつきりと口の刺激が、快感だと認識し始めた。

（そんな口の中が気持ちいいなんて・・・）

自分の中にまた現れた新しい悦に戸惑いながら、口の中の触手がぐるぐるとゆっくり横回転をし始める。

「んっ・・・んん・・・んんっ・・・！」

顎の裏を摩擦されると、堪らないくすぐったさがこみ上げ、背筋までゾクゾクしてしまう。

「口の中も正真正銘、快感を感じれる部分だ。しっかり味わって、達するが良い」

暗闇から声が響き、水木はその言葉を信じられず驚愕した。

（口の中が快感・・・？ゾクゾクする、これは快感なのか！）

そうすっかり自覚すると、身体の内側が火照り始め、散々イカされて虫の息だった性欲が再び頭をもたげてくる。

「んんっ・・・んっ！んんんっ！んぐううううっ！うっ、ぐっ！んんん！」

じゆるじゆると音を立てて口内をまさぐられ、どんどん口腔内の熱が上がってくる。ここまで身体が性的快楽を受け入れられる状態で刺激されれば、嫌でも絶頂を意識しないわけにはいかなくなってきた。

（まさか、口の中でイク・・・？そんな馬鹿な！）

暗闇の声が未だに信じられずにいたが、口腔内にせまる快感にその危険を察知する。体中を良いようにまさぐられ、扱かれ、責められ、意識が擦り切れるほど絶頂させられた。それでもまだ、絶頂を迎えさせられる部分が残っているのかと、水木は戦慄した。

「んぐっ！んんっ！んんんんっ！」

口の中を荒らす触手の動きが速くなり、唇も熱くなってくる。触手から人間の舌のような器官が生え、水木の舌に絡めて深い口吸いを始めてきた。

「んぐっ・・・んん・・・んんんんっ！」

ぬるぬると舌を絡められ、吸い上げられると頭が真っ白になるほどの快感が襲ってくる。すでに口の中の快感は最高潮に達し、水木は唇から触手の液体を垂らしながら口腔の快楽にされるがまま、流されていた。

（口の中が、熱い・・・なんだこれ、堪らない・・・）

水木の意識が快楽へと傾倒すると、それを待っていたかのように口腔の触手から柔らかい繊毛が生え、敏感な内部の粘膜をシュルシュルと刺激する。

「んんんんっ！んんっ！んむっ・・・ん・・・んんんっ・・・！」

触手の繊毛は顎の裏や舌に絡んで裏側を撫で擦り、歯列をなぞってどこまでも水木をゾクゾクと感じさせる。

謎の液体は相変わらず飲まされ続けており、飲むたびに身体が熱くなるのを感じ、それでも飲み込むのを止められなかった。

ジュプジュプと音を立てて水木の口が上下に激しく擦られる。同時に口内も激しく摩擦されて、どんどん淫熱があがってゆく。

「んんっ！んんんんっんんんっ！んんっ！んぐう、んんんん——！」

口の中の感触がこれまで感じたことのない激しい熱に囚われ、水木は意識が白くなって口が耐え難いほどくすぐったく、脳天まで貫く鮮烈な感覚を迎えた。

「んんんっ・・・・ん・・・・ん・・・・んんん・・・・んぐっ・・・・んん・・・・」

頂点を迎え、水木の口の中が再び沈静し、それを見計らって触手がようやく口の中から退出した。

（そんな、口でイッた・・・？）

今しがた自分が感じた絶頂快感が信じられず、水木は戸惑うが、あの昂り方、始まりがあつて終わりがある快感は、間違いなく絶頂と呼ぶにふさわしかった。

「口の中で達したか？どうだ、気分は良いだろう？」

（そんな、バカな・・・！）

水木は自分が迎えた未知の快楽を否定しようとするが、再び触手に口をふさがれ、激しく上下に動かれて、再び口の中で快感が生まれるのを感じた。

「んっぐ、んぐううう・・・！」

触手の先端から伸びた繊毛が、顎裏や舌に絡み、舌をひっぱって吸い上げられる。ゾクゾクと快感が湧きあがり、水木は無意識に触手の先端に自らの舌を絡め、愉悦をさらに引き出すようになっていくことに気づいていなかった。

「んむっ・・・ん、んんっ、んっ、んんん・・・」

触手の先端から人間の舌が現れ、水木の舌を舐めてくる。その動きに合わせて水木の舌も動き、互いに絡めあう愛撫を繰り返している。舌の裏をなぞられると背筋が湧きたつような快感が生じ、水木はその快感に慄いた。

喉に流し込まれる液体も、のど越しが良くて甘いわりに後味は爽やかな美味で、気持ちが良い。

「んぐっ、んぐっ・・・んん・・・んん・・・」

触手の舌と己の舌を絡め合い、愉悦に浸っていた水木だったが、ぬるりと舌に触手が巻き付いて、突然吸い上げられた瞬間、非常な熱が口の中で生まれ、全身を貫く熱が口から体中に走ったかと思うと、身体がビクビクと痙攣し、口の中にジーンと痺れる感覚があった。

（ま、まさかまたイッた・・・）

信じられない場所で二連続にわたって絶頂させられ、水木は戸惑いながらもその峻烈な快感に耽溺しかけていた。

しかし、口から触手が引き抜かれた。そのことによって、水木は口淫からようやく解放された。

「ヒヒヒ、体中どこでも達するぞ。果報者め・・・淫乱とも言えるか？」

暗闇の聲が水木を擁抱するように響くが、水木は混乱して何も返事を返せなかった。しかし、少しずつ正気を取り戻し、水木は自分の状況を鑑みられるようになった。

（うっ・・・まだ身体のあちこちが熱い・・・なんだ、まだ続けられるのか・・・？）

意識がはっきりして自らの状況をつかむと、絶望が頭をよぎってくる。しかし、これは夢の中だ。本当の自分の身体が凌辱されているのではなく、架空の世界の中で自由にされているだけだ。

「気の強い男だ。戦場で死線をくぐってきたのか？生命力がしぶといぞ」

「いや、イキの良い方がこちらには好都合だ。より多くの精力が得られるから・・・」

暗闇の低い声たちが会話するのが聞こえてきたが、この状況をなんとかできる手立てはない。

身体は大の字に拘束され、両手は相変わらず左右に広げられて押さえつけられ、両足は大きく左右に開かれて足先を天井から吊るされている。腰が少し浮いているせいで、水木の股間は良い標的の的にされていた。

そして、それは今も続いている。

「んぐっ、んんっ・・・！んんんんっ！」

両胸の突起は舌触手でべろべろと上下に撫で擦られ、すぐに絶頂近い快楽熱がこみ上げてきた。雄芯には口触手がとりつき、根元まですっぽり飲み込んで、中にある無数の歯でコリコリと刺激してくる。後ろは、刷毛触手が上下に菊座を撫で擦っていた。再び絶頂へ上がる淫熱がこみ上げ、水木は液体を飲み込みながらうめき声をあげた。

（少しでもいいから、止めてくれ・・・ほんとうにこのままだと頭がイッちまう・・・）

しかし、今の水木には状況を打開するどころか、抗議の声を上げることさえできない。その代わりに、普通では味わえない快感量の凄悦を味わわれている。

「まだまだ悦は続くぞ、覚悟しろ」

※中略※

必死に懇願するが、その声色すらも、甘く蕩けていた。

当然触手は動きを止めようとはせず、内の繊毛のザラザラを使って表面を磨き上げるように扱きたてる。

「あっ！あっ！ああああっ！うあっああ！ああああああっ！あっ！あああっ！ああああ！」

下半身に炎のように熱い快感が生じ、それが継続的に続けられ、水木の欲望が満たされてゆく。上から吊られた両足がヒクヒクと痙攣し、快楽の逃げ場がふさがれているのを物語っている。ゾクゾクと肌が粟立つ感覚が背骨を登り、脳神経に到達する快感が伝達されてゆく。

触手は竜巻のように回転を加えながら激しく上下に雄芯を扱きたてる。一擦りごとに射精しているのではないかと思われるほどの激しい激悦が水木の身体を走り、責め立ててくる。

「あああああああつ！あああつ！あああああああつ！うあつ、ぐつ、うあ、ああ、あああああ
ああああ・・・！」

「うああ・・・っ！あああああつ！ああ、ああ・・・っ！」

ギリギリの精神で耐えている水木だが、腰は勝手にカクカクと動いてしまう。しかし、触手は
水木の雄芯に触れるか触れないかの距離を保って、機械的に水木の熱を上げてゆく。

（だ、だめだ、イキたい、もう我慢は無理だ！）

雄芯の淫熱を持て余し、水木の理性は瓦解しようとしていた。完全に放置されているならば齒
を食いしばって疼きを堪えればよいが、時折施される淫刺激に、快楽の味を思い起こさせられ
る。

またもや筆触手が伸ばされ、今度は裏筋をゆっくりと上下に撫で擦った。

「んうううううううっ！」

これまでに最も甘い愉悅を感じ、水木は背中を弓なりに反らせて激しく反応した。ゾクゾクと我慢ならない甘悦が胎の底から湧き上がり、水木の理性を蕩かしてくる。じりじりと迫る射精欲求は、すでに限界を迎えていた。

「どうだ？達悦したいか？さあ、言え、さあ・・・」

自分の身体を良いように操る卑怯な奴らの思惑通りになりたくなどない。しかし、水木の身体は生理的にも限界を迎え、目端からは涙が零れ、食いしぼる歯も血が出そうなほど強固なものになっている。

なにより、雄芯がマグマのように熱く、めちやくちやに疼いてもう我慢などできるはずもない。

「う・・・あ・・・だ、出したい・・・」

これまでの悔しさを押し込んで、水木はとうとう術者たちに懇願した。死ぬほど悔しいが、身体の欲求を抑えるのはこれ以上無理だった。

「どう出したいのか細かく言ってもらわねば・・・こちらでも困るというものだ」

どこまでも水木を騷る言い方に、さすがに怒りがこみあげてくる。下半身の淫熱に抗うように水木は怒鳴り声をあげた。

「つつ！誰が！そんなことっ！言うか！」

ふうふうと荒い息をしながら赤らんだ顔で言い放ったが、すぐに下半身の淫熱が水木の焦燥感を煽った。

「あぁっ・・・！」

本当はすぐにでも出したいというのに、意地を張ってしまった自分をすぐに後悔し始める。しかし、一方的に責められっぱなしのやられっぱなしなど、水木には屈辱を極める事態だった。すると細い糸のような紐触手が両足の間をさまよい、水木の雄芯の根元にぎゅうと巻き付いた。

「うっ・・・ぐっ・・・！」

巻き付かれる圧迫感に快楽を感じながら、水木は延々と、達悦したい欲望と負けたくない思いとの間で葛藤していた。

そんな水木の心情も知らず、触手は妖しい動きをし始める。筆一本だけで触るか触らないかの距離で接していた触手が、突然水木の雄芯の上にのしかかり、ゆっくりと回転し始めたのだ。

「んぐううううううううっ！」

久々に与えられる確かな絶対的刺激だ。水木は相当の快楽を感じ、背中を弓なりにのけ反らせて快感に呻く。

相当の快楽を与えられているというのに、根元を縛られているので決して射精絶頂は迎えられない。それを良いことに、触手の責めは遠慮を忘れたかのように回転数を増やして雄芯を激しく責め始めた。

「あああああつ！ああつ！うああああつあああつ！ああああああああああ！」

絶頂できるほどの快感だというのに、出せない苦しさに水木が叫び声をあげる。身体をビクンビクンと痙攣させ、身体の中でめぐる、消化されない絶頂快楽が籠り、水木をさらに限界へと押し上げる。

「む、無理！無理だ！だめだ！やめてくれっ！あっあああ、あああああああああああああああああああ！」

腰をカクカクと激しく動かしながら、水木は必死の声で叫んだ。しかし、触手の責めは止まらず、ぬるぬるした筆の感触が連続して雄芯の裏筋を擦り、蕩けそうな快楽を絶えず与えてくる。かなりの快感を感じているというのに、射精絶頂できないという快樂地獄に、水木は体中をくねらせて激しく反応し、盛大に嬌声を上げ続けた。

まるで蠟燭の炎の真上に近づけられ、燃えずに黒く焦げ染まるだけの紙のようだ。凄悦に炙られ続けて、焦がれている水木の雄芯は、精液を出したくてさらに力が入り、力が入ると自分に巻き付いた紐触手をますます食い込ませてしまう。

「うあああああっ！ああっああっ！あああああああああああああああああああ！」

タイヤ触手の動きは、纏わりついている粘液が弾け飛ぶほどの速さで回転し、猛烈に雄芯を責め上げている。雄芯が溶けて弾けそうな快感が炸裂し続けるのに、決して終わらない快感の拷問が続けられた。

さらに、水木の下半身を責めている他の触手まで動きを激しくし始め、水木を追い上げにかか

体内に挿っている触手が徐々に動きを速めながら出挿れをはじめ、内部の性感帯をコリコリと明確に擦り始めた。会陰に密着していた触手も頭部を回転させて激しく擦り立て、会陰裏の前立腺に伝わるほどの刺激を与えてくる。

出したくてパンパンに腫れた雄珠もさらに激しく揉み込まれ、まるで雄芯から射精させるのを促すかのように動き、押し上げてくる。

「あああああああああああつ！あつ！あうつ！あぐうううつ！うあああああつ！やめ、やめ、やめ、あああああああああ！」

下半身のすべての性感帯を同時に、さらに激しく責め上げられ、水木は泣き声に近い喘ぎ声をあげた。もう、射精絶頂のことしか考えられなくなり、それがかなうなら何でもするであろう気持ちに意識が急激に傾く。

「どうだ？達悦したいか？どうだ？」

「したい！したいしたいしたい！あああああ！出させてくれえええええ！」

先ほどの確固とした意志とは反対に、水木はいとも簡単に射精絶頂を懇願した。腰を振りたくり、身体をくねらせながら言うその姿は、淫猥すぎていた。

「そんな言い方では了承できないな。もっと敬いながら言わんか」

暗闇の声が不機嫌に言い放つ。普段の水木ならば唾吐すべき相手の反応だが、絶頂を断られてみじめに焦りを生じさせてしまっていた。

そして、筆触手の中にコリコリとした感触まで追加された。雄芯の表面を強く摩擦され、さらに快楽が上乘せされる。さらに迫った射精欲求が、水木を追い詰めてゆく。

「ああああっ！だ、出させてください！お願いします、出させて、出させてくださいいいい！」

とても水木が言っているとは思えない懇願が口から放たれたが、暗闇の声は冷徹だった。

「ほお・・・どこをどんな風にして達したいというのだ？」

「あつ！あつ！摩羅を・・・擦って、吸って、舐めて・・・！出させてくれ、とにかく、射精、させてくれ、ああああ！出したい！出させてええええええええええええええええ！」

そして根元を縛っていた紐触手が緩められ、触手が雄芯にのしかかり、回転してジュジュジュと音を立てて激しく摩擦する。

雄芯以外の下半身を責めていた触手も動きを速め、一気に絶頂へと水木の身体を持ち上げてゆく。

「うあ、あああああ、あがつ……！うあああああああああああああああ！」

ものの数秒も経たず、水木の雄芯の先端から、ものすごい勢いで精液が迸った。ようやく爆ぜた絶対的快楽で、目の前に火花が散り、意識が真っ白になって、身体が制御を外れて激しく痙攣する。射精中も激しく擦り立てられ、続けて二度目の射精絶頂へと導かれてしまう。

「うああああああああ！ああああああああ！ああああああああ！あああああつああああああああああ！」

一度目は苦痛に似た焦れが解消される快感、二度目は純粋な性的快樂だった。腰の奥から身が蕩けるような凄悦をドクドクと感じながら、水木の意識は虚空に飛ばされ、あまりの悦樂に夢の中だというのに意識を喪失した。

「は
・
・
・
・
はあ
・
・
・
はあ
・
・
・
・
は
・
・
・
・
」

瞬く間に二連続の射精絶頂を迎え、最高の快感を味わわれた水木は、全身を弛緩させて身体
のあちこちをびくびくと痙攣させ、開きっぱなしの口からは泡が垂れている。
しかし、水木の恍惚はすぐさま破られ、夢の術中に戻らされた。

「うあつ・・・！ああああ！あああああああ！」

体内に挿されていた触手が激しく上下に運動し始め、強く性感帯を擦り始めたのだ。一気に洞内の快感が上昇し、これまで貯め込まれた快楽の渦をさらにかきまぜ、混沌としたものになり、天上へと上がってゆく。

「ふああああああつ！あつあああああ！あつ！あつ！あつあああああ——
——！！！」

洞内での絶頂を迎えると、煮詰められた前立腺の性感が開花し、会陰でも絶頂を迎えたのだ。

「あぐうううううううううう！あああつ！あああああああああああああ——
——！！！」

会陰の絶頂感も、体内の絶頂に劣らない。しかも同じく、刺激され続ければ延々と絶頂感が襲うのだ。会陰を責めている触手は水木が絶頂しても回転を止めず、過剰に快楽を注ぎ続けている。

体内の触手も負けじと内部の性感帯を擦り立て、絶頂を継続させてくる。

さらに雄芯を責めていた触手が刷毛の繊毛に交換され、裏筋にのしかかり、粘液を飛ばしながら激しく回転を始めた。

シャン、と錫杖が地を叩く音が響き、水木は急激に意識を取り戻させられた。しかし身体は未だに常識外れだった継続絶頂の余韻に包まれていて、淫熱が全体を巡っている。

「うつ・・・うう・・・」

ふうふうと息をしながら、水木は快楽の深い爪痕にうめき声をあげるが、指一本動かすことはできない。

「どうだ？極限まで我慢させられての達悦は至上であっただろう？」

暗闇から面白そうに嗤う声が響き、複数の笑い声上がる。少し理性が戻った水木の喉からは、本音が出た。

「・・・クソつたれ・・・」

その言葉に一瞬静寂が訪れたが、引いた波が押し寄せるかのように嘲笑がどつと沸きあがった。

「大した精神力だ！それなら、もっと焦らして、もっと至極の快樂を与えてやろう！」

すると、水木の雄芯の根元に、また紐触手が巻き付いた。わずかに熱を下げていた水木の身体に、再び淫熱が沸き上がる。

「クソッ・・・クソッ・・・」

悪態をつく水木だったが、その数秒後にその声は熱い喘ぎ声に変わった。

もう何十回射精したんだろうかわからない。もう何十回会陰で絶頂したのか、洞内で絶頂したのかわからない。

通常の人間ではありえない快楽を数々うちこまれたが、夢の中、奴らの術中なので水木の身体は人間を超越してしまう。人間としてのストッパーがなく、過度な快楽責めが延々と続くのも、また拷問だった。

触手が雄芯を吸い上げながら中の舌で表面を舐め回す。

「あああああああああああああ……！」

最後に盛大に多量の精液を吐き出しながら、水木が派手に絶頂する。

内部に刷毛の絨毛をびっしりと備えた口触手が雄芯を根元まで包み込み、激しく上下して水木に激的な快感を与えてくる。

「うあああああつ！ああつ！あつあああああああ！」

まるで雄芯を磨くかのように執拗に上下して鋭敏な正面を刺激し、激感の中で射精する快感は筆舌に尽くしがたいほどだ。あらゆる感覚の触手で雄芯は次々と責め立てられ、感度はどんどんあがっている。

会陰をゴリゴリと責めていた触手は動きをさらに滑らかにし、激しく動いて絶頂を促してくる。もう五回は連続でイカされている。腰から下を包む破裂しそうな淫熱に、水木の身体がビクンビクンと痙攣する。

「あぐっうううっ！あああああああああああ！」

菊座に挿入された触手はいつの間にか二本に増えている。常識では挿らない太さだが、術中は当然のように挿入されてしまう。しかも、痛みは一切なく、快楽のみだけだ。洞内の鋭敏な性感帯にこれでもかと密着し、内部でジュプジュプと動けば、すぐに絶頂が訪れる。触手は内部で上下に動き、回転し、二本が交互に出し挿れされたりする。

「うあああああつ！ああつ！あううううううっ！うあつ！あああつ！あああああああつ！もっ、もう、あああああああああ——！」

たちまち絶頂快楽が訪れ、もう数十回目の絶頂へと昇らされる。雄珠も相変わらず触手に良いように絡みつかれ、ぐにぐにと揉まれるのが最高に気持ちが良い。

下半身で弾けるあらゆる絶頂快樂が水木の理性を吹き飛ばし、甘い声だけを放つ快樂人形に仕立て上げていた。

「んぐうううっ！うあああああああああああ！」

ズゾゾゾ、と雄芯を包んでいる触手に激しく吸い上げられ、相当の快樂が迸り、先端から精液が激しく吐き出される。唯一無二の快樂が水木を襲い、頭が真っ白になる快感が訪れる。絶対的な快樂が終わった後、ようやく雄芯を責めていた触手が静かになり、離れて行った。会陰を責めていた触手も責めを止め、洞内に挿入されていた触手も抜き出される。

「うあっあああああああ・・・！」

引き抜きの快感に水木の身体が激しく反応するが、ズルズルと引き抜かれた直後は、ようやく体内から何もなくなったことで身体が安堵で弛緩した。久しぶりに体中から快樂の感覚がなくなり、水木は少し与えられた小休止に息を激しく吐く。

「はあ、はあ、はあ、はあはあ・・・」

責められすぎた下半身はジンジンと痺れ、さんざん責められた快楽の余韻が未だに停滞して離れない。

ビクビクと痙攣する水木の下半身に触手が巻き付き、がっちりと締め上げてきた。

「すべての快楽を得たと思っっているだろう？しかし、まだ使っていない穴があるぞ・・・？」

ピクリとも動けない下半身をまたも左右に大きく開かされて、雄芯を完全にむき出しにされる。無防備にされた弱点は、水木の意志とは無関係に、呪いのように反応し続けていた。

しゅるりと雄芯に紐触手が巻き付いた。快楽を我慢させて散々焦らし、絶頂させる意図ではないようで、巻き付きは緩い。

これまで何度も味わわされた絶頂を焦らされる快楽には、さすがの水木も音を上げそうになった。あの灼けつくようなたまらない絶頂快楽を何度もあびせられ、永遠に続くのではないかと思うほど、責め立てられた。

散々焦らし責めをくらったせいで、雄芯は焦らされる前に出そうとしてすぐに射精絶頂するようになり、少しの刺激でも水木の雄芯は射精してしまうようになっていた。

今も、少し触手に巻かれただけでわずかに射精してしまう。少しでも射精の絶頂感は間違いなくやってきて、水木の下半身を熱くさせる。

「あああ・・・」

射精直後でもまた先走りの液を零している雄芯の先端に、等間隔の粒が配置された極小の紐が迫る。

「さあ、最高の愉悦だ。存分に味わえ、そして堕ちろ！」

暗闇の声が聞こえると、水木の雄芯の尿道に、その紐触手の先端が押し付けられた。

「っ！」

突然最も鋭敏な部分を刺激されたが、次に起こった出来事に比べればまだまだ序の口だった。そして紐は、そのまま尿道へずぶずぶと挿入されてゆく。

「あがつ・・・！あああああああ！」

細い紐が出す場所から逆に挿入され、異物感に水木は声を上げる。しかし、決して不愉快ではない。むしろ、妖しい快感がこみ上げて来て、水木はまた与えられる未知の快感に慄くばかりだった。

「んぐううううっ！」

配置された粒の部分が鈴口を通過し、激烈な刺激が水木を悶えさせる。当然触手は水木のことなど気にもせず、無感情に尿道へ挿ってゆく。

「うあっ！うあっ！あああああああ！」

ツルツルと尿道内に侵入され、中ほどを通って粒がその部分をかすめた瞬間、燃えるような激悦が湧きあがった。

「あああああああっ！あああああああっ！」

射精や会陰や洞内とはまた違う種類の快楽だが、快感には間違いはない。あまりの激悦に水木の両足が暴れようと力を込めたが、触手に鉄のように強く縛られていて一寸も動くことはできない。

いつの間にか上半身も同じように拘束され、水木は快楽を散らすことを封じられ、ただただ尿道の快楽を味わわされるだけだった。

「あああああつ！ああつ！あつあああああああああああ！やめ、やめてくれっ・・・！うあああああああ！」

つぷつぷと粒が通過するたびに、灼けつくような快感が連続で弾け、水木は無意識に涙を流しながら唯一自由になる首を激しく振りたくった。

「——っ！」

そして、触手の先端が最奥に到達してトン、という感覚が生じた瞬間、燃えるような激感を感じ、身体が勝手に跳ね上がった。

根元の快感は最初に触れられた時ほどではないものの、ずっと最奥に接触されていて延々と絶頂に近い快感が続いている。

ドクドクと水木の心臓が脈打ち、はあはあと口から快楽の吐息が零れる。

（摩、摩羅の中に入った・・・？そんな、信じられねえ・・・！それより、この感覚・・・狂いそうだ！）

水木が感じているのは、意識がかすむほどの快感だった。出す部分をみっちり触手で埋められ、最性感帯を絶えず刺激され続けているのだから、それほどの快楽を感じるのは当然と言える。

「そこを責められるなど夢にも思わなかったろう？さあ、これからだ・・・」

暗闇からまた声が響き、ますます不穏な雰囲気が漂う。これ以上の快楽を与えられては、さすがの水木も屈服してしまうかもしれない。それほどの快感を予感させるほどの快楽の疼きだった。

暗闇の声が止むと、尿道を満たしていた触手が少しずつ引き抜きにかかった。

「はうううっ！うあああああ・・・！」

射精に近い絶頂感が突然訪れ、触手がゆっくり引き抜かれるたびに内部の粒が擦れ、ズキンズキンと灼熱の快感が下半身を走る。内部の性感帯を抉られる快感は、射精絶頂に匹敵、いや、それ以上の快感かもしれない。

「あああつ！あつ！あああああつ！あああああつ！やめ、やめ、あああああつ！」

粒が鈴口から一粒出た瞬間、射精絶頂が訪れた。厳密には、射精しない絶頂感だ。

しかし、それほどの快感がたったの一粒で成され、粒はまだまだ尿道内に挿入されている。

「ひあつ！あああああつ！あああああつ！あああああつ！あああああつ！あああああつ！」

つぷつぷと粒が引き抜かれ、連続絶頂の快感が水木を襲いまくる。分どころか秒単位で訪れる規格外の絶頂快楽を水木は齒を食いしばって受け止めるが、あまりの快感に脳が蕩けだしそうだった。

粒が鈴口を排出する瞬間も射精絶頂が襲うが、尿道内にある未知の性感帯に擦れると、痺れるほどの甘い快感が訪れる。それは刺激さればどんどん上昇する感覚があり、絶頂へ向かう感覚へと酷似している。

(こ、こんなところでもイける・・・？いや、これほどの刺激でイッたら、どうにかなっちゃまう・・・！)

これまで散々快樂責めを受けてきた水木でさえ、戦慄せずにはいられない快樂の予感に、暗闇からまた声がする。

「どうだ？気持ちいいだろう？たまらんか？たまらんだろう。やめてやっても良いぞ？」

(や、やめる？)

突然中止を申し出されて、水木の身体は一瞬冷えた。

これほど淫熱の炸薬を込められているというのに、これを消化されないまま放り出されるなど到底我慢できることではない。その強烈さは、水木は、これまで散々された焦らし責めで思い知っている。

忍耐力は人よりあるつもりだが、その矜持を打ち碎かれるほど、快樂への渴望は有無を言わず強力だ。

すでに絶頂することが当たり前前になっている水木の身体が、このまま放逐されてしまうなど、考えも及ぶものではなかった。

「どうだ？止めてほしいか？」

「・・・・・・っ！」

止めるよう進言すればこの気が狂いそうな快感から解放されるが、水木の中でそれを止める意識がある。

止められる、と聞かされて、水木の身体はもっともっとと快楽が欲しくて激しく疼き始める。今の水木の身体で強制的に快楽を止められるのは、苦痛よりも耐えがたいものになるだろう。しかし、ここで快楽に流されるなど水木の矜持が許さない。

「あっ・・・・あぁ・・・・っ」

（やめろ、というんだ、やめろ、と・・・・！）

しかし、口は簡単に制止と止める言葉を吐こうとしない。

（何を戸惑ってるんだ、止められる手段があるなら、こんな機会はねえのに！）

ぬぶ、と尿道の粒が性感帯を擦り、激烈な快感が下半身を走る。

「うあああああつ！」

尿道口にも同様に粒が通過し、射精絶頂が訪れて、水木は一本の雄芯で二度の絶頂快楽を味わされるといふ、規格外の悦楽を味わわされていた。

「止めると言わないか？止めれば、その快感から解放されるぞ？」

（こ、この快感から・・・！）

解放されるというのに、水木の意志は逡巡していた。なぜだ、どうして簡単に止めろと言えないのだろうか？

自分の身体は快楽を欲しているが、水木はずっとそれに気づかないようにしていた。しかし、ここにきて改めて自分を鑑みる時間を与えられ、否応でも知覚してしまう。

（俺はこの快楽に溺れてしまっているのか・・・？）

これほど自分に屈辱を与えてきた忌まわしい感覚だというのに、今はそれが欲しくてたまらなくなっている。いや、されてしまったのだ。

「沈黙は否定と受け取るぞ。口に出して言わなければ、このまま続けるが？」

「・・・・・・・・っ！」

水木は言えなかった。「止めろ」の一言さえ口にすれば、この快楽拷問から逃げられるというのに、身体を駆け巡る淫熱が口を開かせずらしてくれない。

「や、やめ・・・・・・・・」

口に出しかけて、急激な後悔と焦燥に襲われた。水木の意志は、すでに快楽の虜になりかけていた。

その瞬間、連続してつぶつぶと尿道の粒が引き抜かれた。

「あああああああああああああああ！」

雄芯から煮えたぎるような激悦が迸り、水木は何も考えられず快楽を叫んだ。

理性を驚掴みにして放り投げてしまうような、強引で強烈な凄悦に、快楽のことしか考えられなくなってしまう。

全ての尿道触手が引き抜かれ、水木の身体が絶頂からようやく解放されて身体が一気に弛緩する。気を失いそうだったが、意識はかろうじて存在していた。

「う・・・うう・・・」

「さあどうする？止めるか？止めると言え」

暗闇の声に再び尋問されるが、水木は快楽で疲弊して口を開くことができない。

何もできないまま、また細い触手が鈴口にあてがわれた。今度は、先ほどの粒よりも一回り大きい。こんなものが尿道に挿るとは考えられないが、菊座でもありえない快楽の施しをされた。おそらく尿道にも挿入されるのだろう。

つん、と鈴口を突かれ、水木はその感覚だけで喉が鳴るほどの愉悦への渴望を感じた。

「あつ・・・！ああつあつあああああ！」

先端の粒がやはり尿道に挿り込み、水木に尋常ではない快樂をもたらしてくる。その上、雄芯に巻き付いていた触手が、上下に動き始めた。

「うあつ！あああああつ！だめだ、あつあつあああああああああ！」

内の刺激だけでも理性が持ちそうにないというのに、外側からも刺激されて、快樂は二倍以上になる。

しかし、この極悦は何にも代えがたい。これまで強制的に与えられてきた快樂よりもさらに強力な快感が水木を捕らえ、食いついて離さなかった。

（言えば、言えば止められる、早く言わないと・・・！）

しかし、水木の開いた口は、否定の言葉を紡がなかった。

「あああああああああああああああ！ああつああつ！あああああつああ！うあつああああ！イク、イクううう！あああああああ！」

代わりに快樂を叫ぶ声が迸り、水木は快樂しか考えることができなくなってしまった。

「それが答か・・・なるほど、堕ちるがよい！」

ずぶう、と尿道に触手が挿り込み、先ほどよりも早い勢いで尿道内に侵入してくる。内部の性感帯を、さらに強い密着でコリコリと擦られ、絶悦が水木に訪れる。

「あああああつ！——つ！あつああああああ！」

射精の絶頂以上に強烈な快感が延々と続くこの快楽地獄に、水木は声を詰まらせながら首を振りたくり、叫びまくった。もう、快楽を散らす場所が叫ぶだけしかなく、張り裂けんばかりに水木は快楽の叫びをあげた。しかし、声を出すことすら許さないほどの絶対的快感が次の瞬間に訪れ、歯を食いしばり、首をのけ反らせて快楽を受け止める。

一回り大きな粒をたたえた触手が尿道内を次々と通過し、根元にまで達して意識が飛ぶほどの快感が襲い来る。

「——つ！・・・つ！ああ——

——！」

下半身全体が痺れる甘い快感が訪れ、これまでの快楽の上限を超えるほどの凄悦が訪れる。そしてさらに、尿道内の触手は回転までし始め、内部の性感帯を思うさま扱き倒す。

「つつつつつ！——つ！うあああ
っ！あ、あ、あああああ・・・！！・・・」

雄芯が燃えて蕩けそうなほどの強烈刺激が生じ、身体が快楽を味わおうとして下半身に神経が集中し、喉が機能しなくなる。

尿道内の触手がギョルギョルと回転し、容赦のない抉り快感に息すら詰まりそうだ。さらに外側も繊毛の生えた触手がガシガシと上下に扱きあげ、内と外での刺激に快楽が止まらない。

「ああああああつ！イク、イク、来てる、イク、だめだあああ！あああああああああ
あああああ——！」

尿道内の性感帯が絶頂のように昇る感覚を覚え、その快楽の強さは危険だと無意識が訴えている。しかし、触手の責めは容赦なく水木を追い立て、内の絶頂へと迎えさせる。

「あああ、っ―――！」

雄芯がドクンドクンと脈打ち、これ以上ないほど敏感になって、そこから身体が蕩けだしそうな感覚に、水木は口から泡を噴きながら叫び、黙った。

あまりの快感に、意識がついて行かない。ただ、身体が激悦を受けるのみだった。

内の絶頂を迎えさせられ、尿道内の触手が一気に引き抜かれると、雄芯の先端から、間欠泉のように精液が噴き上がる。

相当な悦樂のはずが、その快感にもビクビクと痙攣するほどの反応しかできず、水木は声もなかった。

触手で雁字搦めにされた体中がヒクヒクと痙攣し、水木の首がぐくりと落ちる。

「さあ淫乱。もっと悦が欲しいであろう？まだまだ続けるぞ。夢の中で気を失うほどにな・・・」

暗闇の聲が高らかに宣言し、水木の両足の間にまた新たな触手が向かう。その鈴口へ繊毛を生やし粒をたたえた触手が密着し、尿道内へ侵入し始め、また快楽の悦獄が始まった。

「あ……う……あ……あ……あ……」

身体を縛る触手が一気に解かれ、水木は下に敷かれている敷布団の上にドサリと落ちる。胸が上下しているのでかろうじて意識があるのだとわかるが、体中のあちこちがびくびくと痙攣し、まともな状態ではないのは見て取れた。

暗闇の声が宣言してからの快楽責めは筆舌に尽くしがたかった。あまりの快楽の強烈さに水木はろくに叫ぶこともできず、ただ一方的に快感を詰め込まれまくった。

洞内を責めるときと同等に、尿道でも触手を上下に動かされ、あり得ないほどの悦を与えられた。雄芯だけでも快楽はあまりあるのに、胸の突起や会陰、菊座にも触手はまたしても絡みつき、水木の身体は快楽の竜巻に巻き込まれた。

性感神経がちぎれそうなほどの激悦を長時間に渡って与えられ、快楽から解放された今でもまだ、身体は責められている余韻が強烈に残っている。

特に責めの対象にされていた雄芯からは、壊れたかのように精液が流れだして止まらない。時折ビュッと精液が噴き上がるが、とろとろと鈴口から精液がとめどなく流れているだけだ。

「もう声も出せんか。反応も少ない。まあ、あれだけ責められれば仕方ないだろう」

暗闇から声が伝い、水木の耳に遠くから響くように入ってくる。

「ふん、意識はまだ残っているようだ。この夢の中が確立されているのがその証拠だ。では、次の段階に行こう。これだけの逸材、ぜひとも欲しい」

「よし、立て」

暗闇の中で会話が交わされ、勝手にことが進んでゆき、ようやく快楽から解放された水木をさらに追い立てようとする。

しかし、今の水木の足腰は立つどころか動くことすらできなくなっている。ヒクヒクと反応しているのは、生理的な快楽の反応だ。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

水木の口からかすれた息が漏れ、理性が戻ったことを示している。しかし、身体は指一本動かすことはできなかった。

「ほら、立てというのに」

水木の両脇に触手が巻き付き、天井から吊るすようにして無理矢理立つ姿勢にさせる。しかし、水木の身体はぐったりとして動く気配など全くない。頭も前に垂れ、俯いたままハアハアと息を続けている。

「しっかりせんか！立てと言っているだろう！」

暗闇の聲が怒声を放つと、水木の足元、両足の間に大人の腕ほどの太さをたたえた触手が生み出され、そのまま上方へと身を上げた。

「！-」

水木の股を割るように触手が食い込み、水木に再び快樂の火をたぎらせる。散々責められた下半身の一筋を一度に食い込み刺激で快樂を与えられ、水木の雄芯から精液が放たれる。

「ううう、ああ、あつああああ．．．！」

触手はぐいぐいと股間に食い込み、水木の性感帯全体を圧迫する。こんな状態で足腰が立つはずがない。再び快楽に溺れて足の力はなくなり、余計に食い込みが強くなってゆくだけだ。

「ほらほら、さっさと立て立て」

暗闇の聲があざ笑うように囁し立てると、水木の股間に食い込んだ触手が前後運動を始めて股全体を擦り始めた。

「あああああああつ！あああああつ！ふっあああああああああああ！」

これまで苛烈に責めまくられて一点一点の性感帯が成熟した水木には、耐え難いほどの快楽の責めだった。

菊座、会陰、雄珠、雄芯すべてを同時に騷り擦られ、水木は再び簡単に絶頂してしまい、雄芯の先端から激しく精液を吐き出した。

「ほらほら、達して快楽を得ている場合ではないぞ？歩け歩け」

しかし、その言葉とは裏腹に股間を擦り上げる触手の動きが早くなる。

しかも密着部分に繊毛まで生え、ゾリゾリと股間を擦り責め、粘液をまき散らしながら、碌に足腰も立たない水木を責め上げる。

「ああああああっ！あつ！あつ！あつ！あつ！あつ！うあ、ああああああつ・・・・・・！うつあああつ、がっ・・・・・・！あああああああ・・・・・・！」

先ほどまでの責めの余韻が再び湧きあがり、水木の身体の淫熱が燃え上がってしまう。そんな身体で淫猥な責めを受け、感じない方がどうかしている。

間もなく会陰でも絶頂が突き上げ、水木は背中を弓なりに反らせる。そこをジヨリジヨリと繊毛で前後に責め立てられ、絶頂快樂が継続される。雄芯の裏側も繊毛で摩擦され、射精絶頂がとまらない勢いだ。

「イキすぎだな。しかし、どこまでイクのか見ものだな」

「廻りがいのある体だ・・・」

水木の狂乱を前にして、暗闇の声は他人事として傍観している。

「うぐっ・・・・・・！うあああああああああつ！」

繊維の強度が強くなり、より激しく股間に食い込んで責めがどんどん激しくなる。前後運動も激しくなり、感じる快感の凄さに水木は身をくねらせながら、股間の一線でいくつも弾ける絶頂に乱れ狂っていた。

「うあ・・・あああああああああ・・・！！」

体中を巡る快感の嵐に淫熱をまとった艶声を、水木は上げ続ける。絶頂は連続から継続に成り代わり、さらに水木を責め苛んでくる。

刺激され続ければ延々と絶頂するこの快楽には逃げ場はなく、水木はただ身をくねらせて、見物人たちを愉しませるだけだった。

刷毛状だった繊維はべとべとにヌルつく肉のような物質に成り代わり、激しすぎた刷毛繊維とは真逆に、優しいタッチで股間を擦り始めた。

「あっ・・・ああああ・・・ああああ・・・」

これまでの灼けつくような快感ではなく、水木の身体を蕩けさせるような快感に、下半身からドクドクと快感が湧きあがってくる。じゆるじゆると音を立て、粘液を垂らしながら水木の性感帯を思う存分擦り立て、やがて素早い動きで前後に動き始める。

「ああっ！あっ！ああああ・・・っ！あっあ、あああああっ！ふあああっ・・・！」

これまでの強制される快感ではなく、自分が気持ちいい頂点で絶頂させられ、水木は耽溺の甘い声を上げた。あまりの愉悦に、体中がびくびくと痙攣し、快感のあまり水木の口の端から涎が垂れている。

何度もこの肉責めを繰り返され、水木は何度も射精絶頂を繰り返し、雄珠もめちやくちやに擦り立てられ、会陰絶頂を味わい続け、洞内で摩擦される性感帯も絶頂を迎え続けた。

「あっ・・・ああ・・・」

触手はまた変形し、びっしりと粒をそろえた形状に変化してゆく。その粒はパチンコ玉の大きさの丸い粒が生えそろっていて、表面はゴムのように柔らかいが、芯がある感触のものだった。

表面へふんだんにぬるつく粘液が分泌され、水木の股間に割って入り、激しく食い込ませてくる。

「ああああああ・・・」

絶頂が終わりかけた水木には、この刺激は耽溺ものの快感だった。フニフニとした感触にコリコリとした感触が奥に潜んでいて、さらに粘液でズルズルにされてしまっている。そのままゆっくりと前後に動かされ、水木は触手の動きに合わせて腰を妖しく振りたくった。

「あっ！あぐっ！あああああっ！ふあああ、あああああっあああ！」

至高の快感が続き、水木の身体がガクンガクンと縦に揺れる。触手の前後運動が早まり、水木はたちまち絶頂を迎えた。しかし、これまでに強要される絶頂感ではなく、自分のタイミングで最も気持ちよく絶頂できた至極の悦楽だった。

「あっ・・・ああ・・・あ・・・あ・・・」

体中にじゅわあ、と淫熱が広がってゆき、心地よい熱さに身体が包まれる。最上の快樂を与えられた水木はすぐに脱力して身体を弛緩させたが、股間の触手の食い込みは止まらない。またもや前後にジュッジュッと擦られ、絶頂を迎えたばかりの性感帯に甘く激しく愉悦がせりあがってくる。

「ああ……あああああ……あつ……あああああ……はあああ……」

蕩けた声を出しながら、水木は甘い嬌声を上げ続けた。

続きは製品版でお楽しみください。